

向井秀樹教授送別の辞

福田 英嗣

東邦大学医学部皮膚科学講座（大橋）准教授

向井秀樹教授は、平成28年3月31日をもちまして東邦大学医学部皮膚科学講座（大橋）教授を定年退任されることとなりました。東邦大学医学部皮膚科学講座（大橋）（当講座）を代表して御礼の言葉を述べさせていただきます。

先生は、昭和51年に北里大学医学部をご卒業された後、北里大学医学部皮膚科学教室 西山茂夫教授のもとに入局され、昭和56年同病院助手、昭和58年同病院講師、平成3年より横浜労災病院皮膚科部長、平成19年に当講座教授に就任されました。平成20年には当講座同門会の設立や、病院の執行部に入られ院長補佐および病診連携室室長、平成24年からは副院長および医療安全管理室室長を兼任、平成27年からは医局員の海外留学の開始など、当講座のみならず大橋病院全体の発展にご尽力頂きました。

向井教授は、日々の診療・教育はもちろんのこと、研究や学会活動も休むことなく続けられ、平成20年2月にはアトピー性皮膚炎治療研究会第13回シンポジウムの会頭、平成26年1月には第4回日本皮膚科心身医学会の会長、さらに同年7月には第38回日本小児皮膚科学会学術大会の会頭を務められました。特に、第38回日本小児皮膚科学会学術大会は渋谷で開催されたのですが、この地域ではこれまで皮膚科関連学会の大規模な学会が開催されたことがなく、加えて降雨という悪条件の中で2日間の会期で700名近い参加者に足を運んで頂き、無事成功裏に会を終えることができました。私には事務局長という大役を任せて頂き貴重な経験を積ませていただきました。

先生はアトピー性皮膚炎を筆頭にさまざまなアレルギー疾患や尋常性乾癬、皮膚外科など多岐の専門領域に携わり、その経験や知識などをわれわれ医局員に非常に丁寧にご指導頂きました。先生の皮膚科学への情熱はそのご指導からも実感できるものであり、特に、先生のライフワークの1つであるアトピー性皮膚炎の領域では、数多くの業績を残されました。これまで東邦大学医療センター大橋病院皮膚科（当科）では、アトピー性皮膚炎で入院加療する重症な

患者は年間5名程度でしたが、先生が就任された後は日本全国から多くの重症なアトピー性皮膚炎患者が先生の診察を求めて来院し、入院患者数は年間80名程に急増しました。その影響もあり当科ではアトピー性皮膚炎に関して多くの臨床研究を行うことができました。それにより平成22年5月には第26回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会において、「アトピー性皮膚炎における入院療法の有用性—ステロイド外用量と血中コルチゾール値推移の検討—」という演題で、金賞を頂き、臨床研究の楽しさを知るきっかけとなりました。研究の分野は当講座において欠けている重要な要素であり、大学人（研究者）としての在り方をわれわれに示して頂きました。

また、先生は医局員との対話を重視し、医局員と毎年個人面接を行い、個人的な悩みや来期の目標などを細やかにご相談にのって頂きました。そのことにより各自、自分の進むべき方向性を見つめ直すきっかけになっていたと感じました。私も先生の在籍期間中医局長をさせて頂き、その都度叱咤激励され、多様な見方や医局運営の在り方を教わりました。さらに、毎年1月には医局員をご自宅にご招待くださり、御奥様の大変美味しい心づくしの手料理をふるまってくださいました。そして皆、舌鼓を打ちながら、前年の反省と新年の抱負などを熱く語り合いました。その節は奥様に大変お手数をお掛け致しまして申し訳ございませんでした。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。本当に有難うございました。

ここに長きにわたっての御指導と当講座、皮膚科学講座（大橋）へのご貢献に感謝申し上げますとともに、先生のご健康とご多幸を医局員一同、心から祈念いたしております。これまでは大変ご多忙でいらっしやいましたので、これからは是非ともご家族とのお時間を作って頂き、しかしながら医局員にも先生の貴重なお時間を少しばかりでも分けて頂ければと図々しくも願っております。引き続き御指導のほど宜しくお願い申し上げます。